

### 第3回 大阪府スポーツ推進審議会 第2次大阪府スポーツ推進計画策定部会 議事概要

日時 平成29年7月25日(火) 15:00~17:00

場所 大阪府庁 本館5階 正庁の間

出席委員等 桂専門委員(部会長)、植田専門委員、大前専門委員、豊川委員、松田専門委員

〔第2次大阪府スポーツ推進計画 答申素案〕

資料1により事務局から説明

〔意見交換〕

A 委員 「大阪スポーツ〇〇〇の創造」について事務局でも検討しているようであるが、委員から何か良案はないか。事務局ではどのような意見があるのか。

事務局 「大阪スポーツ未来の創造」「スポーツ元気都市 大阪」などが出ているが、まだピンとくるものはない。

B 委員 前回の会議でも発言したが、子どもが複数の競技に取り組むことができる環境づくりについて記載を願いたい。

A 委員 「1あらゆる世代でのスポーツ活動の推進 ①子ども」中に、「単一ではない多種の運動経験がより良い効果をもたらす」と記載していることで、説明できると思う。

B 委員 このような表現が入っていれば結構である。

A 委員 「トップアスリートの指導力等を活用」とあるが、トップアスリートの中には、自分ができるプレイを他人(一般人)はできないことを理解できない方もいる。「トップアスリートのパフォーマンス等を活用し」とした方が良いのではないか。

E 委員 中には指導力のあるトップアスリートも居るため、「トップアスリートのハイパフォーマンス・指導力等」のように併記しても良いと考える。

B 委員が言われたことは、「主な施策の方向性」では上手く落とし込めていない。わが国では、小さな頃には複数の遊びをしているが、種目になった瞬間にその一種目だけしかしないことが問題。「幼少期から小学校の高学年、中学校程度までは複数の種目を楽しめるような仕組みづくりを推進」といった表現を入れることはできないか。学校で運動部活動をしている生徒が、地域では別の種目をプレイすることなど。

B 委員 幼少期だけでなく中学校までは一つの種目に囚われず、例えば季節に応じたスポーツや、複数の種目の大会に出場するなど認められるというように。

子どもだけではなく大人もそうであっても良いのではないか。

E 委員 理念の部分であるが、「スポーツを通じて」とすると手段になってしまう。「スポーツを楽しむ、幸福で豊かな生活を営むことは全ての人の権利です。」とすることはできないか。

A 委員 賛成。最初に言い切るのが良いと思う。

E 委員 基本計画では「スポーツは文化としての身体活動」とされているが、素案の最後の方では文化とスポーツを対立的な別物として書いている。概念を整理した方が良い。

「スポーツを通じて」であるが、基本計画でも使われているので、そのままでも構わないが、混乱を招かないように検討して欲しい。

「6 計画の推進に当たって」は、1 ページと 2 ページの間、又は 2 ページと 3 ページの間に持ってきたほうが良い項目もあるのではないか。

事務局 前に移動するもの、この位置に残すもの、「推進方針」に入れ込むものなど、検討する。

D 委員 重要業績評価指標は、スポーツを「する」内容に偏っていると感じる。「する」ことのない人のことも考え、ボランティアの参加人数など「ささえる」項目等を増やし、バランスを良くするべきではないか。

E 委員 評価指標は実施した事業に対しての評価になると考えられるので、これだけでは十分ではないと感じる。例えば、「スポーツに関わる多様な人材と場の充実」という項目から、障がい者に対するスポーツの指導ができる人向けに講習会を年間何回開く、スポーツ指導員の人数の拡大等を入れると、事業と指標の幅が広がる。事業内容に対応した評価指標とすべき。予算やどの部局が担当になるか等、問題があると感じるが、事業と評価の関係を明確にして欲しい。

A 委員 例えば、ボランティアにしても競技団体のもの、市町村のもの、いろいろある。大阪府登録ボランティアの人数や活動実績など、府で統計を取りやすい項目を入れることはできるのではないか。

事務局 なみはや国体で結成されたスポーツボランティアの人数、派遣した事業数は把握している。しかし、各競技団体、市町村でのスポーツボランティア活動までは把握できていないのが状況である。

A 委員 基本計画と比較できる指標も大切であるが、多過ぎると評価が困難になる。

レガシーとして府のスポーツボランティアがあると思う。高齢化しているのをどうするかというものもあるだろうが、20 年も継続していることは素晴らしい。3 大会を一過性のものでなく今後残したいことを指標に入れることはできないか。

E 委員 評価指標は、どのようにしてデータを取るのか等、検討が必要と感じる。

また、予算にも問題もあると感じている。「大阪マラソンの進化・発展」とあるが、基金を取り崩しながら実施しているのが現状ではないか。基金がなくなれば税金を入れなければならなくなり、府民に理解を求める必要が出てくる。ゴールデンイヤーズのうち金は付いて来るかもしれないが、アピールできる時期なので、今から府民の理解につながる動きを計画的に考えないといけな。そうしておかないと2つ目の柱もガタガタになる虞がある。残された施設についても考えなければならない。

A 委員 税金を使うだけの意義があるのか、スポーツ大会で府民一人ひとりにどのようなプラスの効果があったのかを考えないと、次に繋がらない。

E 委員 「競技スポーツの振興」の記述が薄い。色々な種目を楽しんだ子どもがもっと楽しみたいということで競技スポーツに繋がっていく関係があるし、子どもも大人も競技スポーツに取り組むという面もあるので、2本目の『柱』だけで書くのではなく、少し知恵を絞って掲載場所を検討してもらいたい。

B 委員 競技スポーツの振興であるが、この書き方であれば、トップスポーツをイメージしてしまふ。ワールドマスターズゲームズ等も含め、中高年の競技スポーツの振興といったものを入れることはできないか。

A 委員 ワールドマスターズゲームズはゲームズであり、世界選手権やオリンピックに出場していないが、高年齢になってもチャレンジしたい人たちが出場している。それを「競技スポーツの振興」に入れるのは方向性が違い、難しいのかもしれない。

トップアスリートの発掘や養成とは違った書き方になっている。高齢者が記録に挑むということもある。狭い範囲で書いているように見える。

E 委員 「競技スポーツの振興」という文言自体を変えることも検討してもよいのではないかな。大事なことは関係性を示すこと。子どもの頃は多種目、そこから競技スポーツに繋がる流れや、障がいのある・なしにかかわらず一緒にスポーツをすること等を示して欲しい。子ども、働き盛り、高齢者と切り分けて書くと、分かりやすくなるかもしれないが、繋がりがなくなる。関係性や繋がりが分かるポンチ絵を作って欲しい。

生涯スポーツという言葉も整理した方がよい。例えば、学校・大学でのスポーツの期間が終わったときから生涯スポーツとしている人がいたり、競技と違うスポーツを生涯スポーツとしている人もいる。両方とも間違えたとらえ方であり、老若男女、障がいのある・なしに関わらず誰もができるスポーツであり、一つの軸として、生まれて死ぬまでの時間軸、もう一つは空間軸がある。その人が置かれている空間は多様であり、どのような状況でもスポーツはできるものであり、それこそが生涯スポーツである。生涯スポーツに複数のとらえられ方があまま

計画に示さず、今回、明確に説明することが必要である。

A 委員 生涯スポーツ社会づくりという言葉や国体を何のために実施するのか等のテーマは 20 年前に既に検討されている。今頃になって高齢者が遊びでやっているのが生涯スポーツだという認識は止めて欲しい。

「一生涯にわたって」というのがポイント。「する」「みる」「ささえる」ことによってスポーツを文化として捉えている。

E 委員 生涯スポーツは概念であり、これが生涯スポーツといったものはない。誤って具現化されて「この競技、種目が生涯スポーツ」だと思われている。

一部の人間だけに占有されるスポーツではなく、誰もができるスポーツをライフオンスポーツと呼び、それが実現された社会が生涯スポーツであり、20 年前に議論されたものである。それをもう一度押さえないといけない。

A 委員 今は「生涯スポーツ社会づくり」の「づくり」が取れている。かつては社会を創らなければならなかった。現在、社会はできていると考えても良いのではないか。スポーツを楽しませるだけでなく、その活動を支援するといった表現もあっていいのではないか。

「1 あらゆる世代でのスポーツ活動の推進」では、子どもから働き盛りに飛んでいる。青少年は子どもに含まれていることになるが、ならばここで競技スポーツに言及することが必要ではないか。

D 委員 1 本目の『柱』ではライフステージに応じたスポーツが記述されており、2 本目の『柱』は競技スポーツ、トップアスリートが都市魅力に繋がると記述されている。2 本目の競技スポーツはトップアスリートやプロスポーツに限定すると分かりやすいのではないか。

E 委員 スポーツを手段にして大阪をどうアピールするかというのが 2 本目の『柱』。1 本目の『柱』には府民みんなが目的としてスポーツを書くことを書けば良いと思う。

A 委員 「競技スポーツの振興」にスポーツ教室の開催などが入るために違和感を感じていた。構成を少し検討した方が良いのではないか。

E 委員 International Council of Sport and Physical Education 「Declaration on Sport」(国際スポーツ・体育協議会；「スポーツ宣言」1964(1968) 草案が、1964 年の東京オリンピックが終わった次の日に浅草で作られ、次のメキシコ大会で発表されている。

「1 プレイの性格を有し、自己とのあるいは他者との、または自然とのたたかいをふくむところの、いかなる身体活動もスポーツである。」

「2 その活動が、競争を含むものである場合には、常にスポーツマンシップに則って行わなければならない。フェアプレイの理想を欠いては真のスポーツはあり得ない。」とされている。

A 委員 当時は「みる」「ささえる」は捉えにくい内容であったため、フェアプレイといった言葉が入るが、その時代のスポーツの観点が社会に広がり、時代とともに文化とスポーツが分けられてしまった。「計画の推進に当たって」に「文化は人々の生きがい及び想像力の源泉」「文化とスポーツの双方に相互の視点や施策を盛り込んでいく」と書いてしまうと分かりにくくなってしまふ。

E 委員 やはり用語集でまとめたり、定義等は初めの方に記載した方が良いのではないか。

スポーツ基本法という言葉そのまま使うと分かりにくいため、咀嚼して記載したほうが良い。スポーツはプレイ性、フェアプレイ（私もあなたも楽しい）、身体活動の3つが組み合わさったもの。今回の計画に3要素を表現できたら良いと思う。

A 委員 高齢者の項目であるが、介護予防といった言葉が社会のどこでも使われている時代である。スポーツにレクリエーションも含まれると思うが、レクリエーションを記載すべきかどうか。

E 委員 スポーツにはレクリエーションを含むので、強調するには「スポーツ（レクリエーションを含む。）」等の表現が良いのではないか。健康の保持増進という文脈では「運動・スポーツ」等と表現することもできる。運動は必要があるから行い、スポーツは楽しいから行うものである。「手軽に体操のようなスポーツ」といった表現はスポーツに含まれるので分かりにくくなる。

C 委員 現時点では、スポーツは特別なもので、障がい者スポーツも含めて体操は手軽にできるものといった印象がある。

B 委員 高齢者の部分には、普及・推進・啓蒙といった言葉を入れたらどうか。ジェロントロジースポーツという考え方があり、年齢を重ねた分、多種多様なスポーツの楽しみ方があると思う。障がい者のスポーツに関しては、障がいのない人も障がい者スポーツを体験することで理解が進む。

A 委員 「スポーツ関連施設において、障害者差別解消法に基づく合理的配慮の徹底やバリアフリー化を一層促進します。」とあるが、新たに施設を建設する時代ではなく、有効利用が考えられている。学校施設や色々な施設を有効的に使用するためには、「バリアフリー化の観点で見直す」というように書けないか。「ユニバーサルデザインに配慮した」という表現も必要と考えている。

E 委員 障がい者スポーツについて特別なイメージを感じたと言われたが、確かに「障がい者スポーツ分野でアスリートとして活躍する方々」といった表現から、競技スポーツをしなければ障がい者スポーツをしていることにならないイメージに繋がってしまっているのではないか。

C 委員 障がい者のスポーツを見てもらうときに、障がいの種類もあり、レベルも違う。障がい者スポーツのトップアスリートをいきなり見せられると「あー無理」と諦めてしまうこともある。また、精神障がいや身体障がいなど一括りにされると違和感がある。自分の状態にフィットしたスポーツを楽しむ、多様な関わり方があるということ表現できないか。

E 委員 様々な障がいやその障がいの状況に応じて楽しめるスポーツといった表現ができれば良いのではないか。小さい子どもは小さい子どもにフィットした興味・関心・能力に応じたスポーツの楽しみ方があるように、また、高齢者もパフォーマンスが落ちてくるので落ちてきたなりのスポーツへの関わり方がある。障がい者を理解しているのが分かるようなリード文にする必要がある。

C 委員 スポーツ関連施設のところで気になることがあるが、例えば、一般の施設を障がい者が利用するのはなかなか難しい。肢体不自由ならバリアフリーで対応できるが、精神障がい者が奇声をあげる姿等を一般の利用者が見たとき、施設の問題以前に利用者の理解の方が必要になる。健常者スポーツと障がい者スポーツを分けて考えないような理解を進める取組などを入れることができないか。

E 委員 心のバリアフリーといった、相手に対してどのように接するかといった、理解を深める研修などを開催するなど、施策に書くことはできないか。心の壁を取り去ることが大事だと感じる。

A 委員 「多様な障がいに対応して」といった文言を入れることはできないか。音楽ではバリアフリーコンサートなどが実施されている。障がいのある人とない人が一緒に音楽を楽しむ取組である。施設改修だけではなく、誰もが一緒にプレイできるバリアフリースポーツ等を検討しても良いのではないか。

B 委員 障がい者スポーツの推進は障がいのある人とない人が一緒にスポーツをすることで繋がるのではないか。一緒にスポーツをすることで色々なことが見え、理解していくもの考える。共にスポーツをする環境づくりのようなことは書けないか。

A 委員 障がい者の水泳を拝見したとき衝撃を受けた。府内の或る市には、コースは分かれているが、障がいのある人とない人が同じプールで一緒に泳ぐ施設もある。障がい者スポーツの大会を開くにしても「ささえる」人が多数存在する。一括りにせず多様な障がいといった言葉は必要と感じる。

D 委員 ここに書いてあることは障がい者だけでやっているスポーツととらえられてしまう。障がい者スポーツも完成されたものではなく、今後、創生しなければならないものもある。

誰もが一緒に参画できるようにして欲しい。前文に説明を入れる等検討すれば良いのではないか。

A 委員 ボッチャは大阪にナショナルトレーニングセンターがあるため、参加拡大のチャンスであると感じる。ふうせんバレーは共にできるスポーツ。こういうものを例示すると分かりやすくなる。

B 委員 小さい頃三角ベースボールをしたことがある。「ごまめ」と言う特別ルールをつくった。スポーツをしたいときに、その状況に応じたルールを作ることがあってもいいのではないか。大阪発のルールや、ハンディキャップを取り入れるといった発想ができる環境整備も必要ではないか。

B 委員 「スポーツを通じた地域・経済の活性化」であるが、スポーツの経済効果を研究する組織からその効果を府民に示すことができればスポーツへの理解が深まる。経済効果を指標に入れることはできないか。

A 委員 経済効果は難しい指標だと感じる。

E 委員 一枚もののポンチ絵で関係性を説明できるものを作成して欲しい。特に2本目の『柱』について、この5年間の内容は書きやすいと思うが、その後のことは難しいと感じる。3大会があったのでやりましたとならないように、今のうちに作戦を練って戦略的に構想すべきであると思う。

A 委員 10年後も都市魅力の創造が続くかなあ。

E 委員 市民が自発的に都市魅力を創造できる仕組みづくりのための種蒔きが必要。公的ではなく市民を巻き込む事業を展開して欲しい。そうすれば税金を投入するにしても理解を得やすい。

A 委員 ゴールデンイヤーズの機会に府民がワクワクしてレガシーが残ると良い。素通りすると寂しい。

E 委員 「1 あらゆる世代でのスポーツ活動の推進 ①子ども」では学校を中心として考えているのは分かるが、学齢期であっても地域でのスポーツはある。その関係が書かれていると良い。今後、学校にスポーツの外部指導員が入っていくことなどの問題も挙げられると思う。

A 委員 スポーツ少年団は公的に認められている団体だし、そういうものがあるということを知らしめる。現在は特定の種目だけで活動していることが多い。活性化や季節に応じた多種目化

等も盛り込んでもいいのではないか。

E 委員 中学生など生徒が複数の種目に関わっても良いのではないか。一種目だと、怪我をしたらそれで競技生活は終わりとなる。(複数の種目だと) スポーツから遠ざかるのではなく、他の種目を始めるきっかけにもなる。

B 委員 スポーツという切り口で大阪をどんな街にしていきたいのか、みんなでスポーツの街大阪を考えるきっかけを設けて欲しい。学生ボランティアなどの中には、もっと人の役に立ちたいと考えている人も多い。彼らが今後の大阪を作る人材になる。

A 委員 生涯スポーツの捉え方、文化とスポーツの書き方を整理して欲しい。

〔今後のスケジュール〕

事務局から説明

第4回部会、平成29年8月14日(月)15時より17時

〔閉会〕